

平成20年度 第2回「海上の森運営協議会」議事録要旨

日 時 平成21年3月23日（月）10：00～12：00

場 所 自治センター4階 大会議室

出席者 加藤岩雄委員 加藤倫教委員 木村光伸委員 國村恵子委員 酒井立子委員
鈴木敏明委員 芹沢俊介委員 竹中千里委員 松尾 初委員 山川一年委員

傍聴者 3名

1. あいさつ

松下 栄夫（農林水産部農林基盤担当局長）

2. 議事

(1) 平成20年度海上の森保全活用事業の取組状況について

事務局

議題1 「平成20年度海上の森保全活用事業の取組状況について」説明

委員

体験学習の実施について、「森の教室（入門編）」4回1セットは定員50、参加数23、延べ人員49とあるが、これは50名に対して申し込みが23名あり、平均2回ちょっとしか来なかったという意味か。また、「里山のものづくり」は定員30人に対して参加数が93人と膨大だが、全4回あるのに延べ人員が110しかないようだが。

事務局

説明が不足していたが、「森の教室」は定員50人、実際に申し込んだ人が23人で、全4回の中で休んだり来たりということがあって延べで参加した人が49人ということである。「里山のものづくり」は4回1セットではなく、1日だけのものを2回、2日セットのものを1回やっているが、そこまで細かく書けなくてこのような形になっている。

委員

先日オープンした幼児森林体験フィールドは、今後、海上の森センター主導で幼児を対象としたイベントなどの事業が行われる予定なのか。

事務局

3月末に完成する幼児森林体験のプログラムを県内の幼稚園・保育園関係等に配布し、そのマニュアルを見ながら幼児に森林体験させてもらうのが最終的な目的である。21年

度のムーアアカデミーセミナーは幼稚園・保育園等の先生などを対象に行ない、マニュアルを使って実際に利用するときの指導者を養成したいと思う。

委員

取り組んだいろいろな事業について、事業を行なった方としての評価はどのように考えているのか。

事務局

森の教室や調査学習会などはおおむね好評で、参加者数が多く、継続して行なっている。ムーアアカデミーセミナーは心身障害者や幼児へ幅を広げており、毎年プログラムを構成し直して、できるだけ意見を反映できるように行なっている。

事務局

参加者の目標数ではクリアしている。結局取り組みの柱は、愛知万博記念の森として保全しているかどうか、森林や里山に関する学習や交流が進んでいるかどうかということだと思う。里の教室では生物多様性も確保され、また森の教室では森林の維持管理が図られ、企業連携という形で企業参加もいただいている。昨年は心身障害者の方に参加してもらえるプログラムを開発、今年は幼児の方の開発をし、幅広い層の方やいろいろな分野の方に来ていただくようなプログラムを展開していくことは、非常に大きな意味があることだとも考えている。それから指導者養成講座のようなこともやっているが、学んだ方がいろいろな所で活動していただけるのではないかと期待しており、そういった総合的な評価をしながらやっていきたい。

委員

自分たちの評価で構わないので、公表していてもいいと思う。公のものなので、評価をきちっとしていくと良いと思う。

委員

組織が大きくなり、イベント等がたくさんセットされると海上の原点がおろそかになり、われわれ住民・生活者との正しい交流が不可能になる。森を訪れる人と住民とのトラブルもある。イベントの増加は環境負荷を伴っているものであるという認識を強く持っていただきたい。予算を考える上でも参加者数などの数字はある程度のところまで重視されなければならないだろうが、今後の方針がどうなるかが少し不安である。それから、われわれ住民・生活者が望んでいることとセンターの活動が同じ地区の中に複雑に入り組んでいることをよく考えなければならない。協力し合えるところはあると思う

が、一方で妥協できないところもある。われわれ住民・生活者が直したいと思うところ
と、このプログラムにはある程度乖離があると思う。

委員

評価について、県の答えが少しずれている。そもそも運営協議会なので、海上の森が
どう変わっていくか、どう変わらなければいけないか、どう変えていくのかという話が
協議され、方向性が定まっていかなければならない。取り組みに対して事業者としての
評価を出し、それを私たちがどう評価するかというもう一つプロセスが要るが、その
ところが協議会が立ち上がってから1回もないのが問題だと思う。何らかの客観的な評
価をするような仕組みを作っていかなければいけない。

委員

センターの啓発活動の中で、来年度から4つの企画を海上の森の会が委託を受けて、運
営していくことが提案されている。今の評価の問題は、委託を受ける者としての問題と
して関わってくると思う。

座長

住民の意見を20年度の活動でどのように反映させて活動されたかという点はいかが
か。

事務局

改善点をアンケートに書いている方もいるので、同じ講座の中でも内容的にある程度
変えながら対応することも必要だと思う。全体の成果の中でどういった評価をしたとい
うことを私どもが出すかどうかは検討したいと思う。

海上の森の良さは、昔の里山の生活がある中で、十分ではないがいろいろな体験学習
を行ない、参加者に実際の自然や生活文化を感じてもらえるという点があると思う。た
だ、実際に生活されている方との調整についてはよく考えながら進めなければならない。
森の中に入るということについては、基本的にパンフレットに明示した道を散策しても
らうようにしており、他の所は立ち入らないよう区分けしている。

委員

3月6日に海上の森センターを視察に訪れた北京大学関係者は中国の国家プロジェク
トの企画者でもあり、結構中身の濃い質問があったと思う。報告書には人数しか書いて
ないが、中国が今抱えている環境問題の中で国家プロジェクトがかかわってくることに、
センターの対応が良い影響を与えたことにもなるかもしれない。

(2) 平成21年度海上の森保全活用事業の事業計画(案)について

事務局

議題2「平成21年度海上の森保全活用事業の事業計画(案)について」説明

環境部

「平成21年度海上の森自然環境保全地域維持管理事業(案)について」説明

COP10(生物多様性条約第10回締約国会議)の概要を説明

委員

COP10の関連事業として計画があるということだが、何をやろうとしているのかよく見えてこない。例えば谷津田の再生について、もう少し詳しく説明していただきたい。

事務局

谷津田は、農地整備の図面の中で水色のため池予定地の上か下に作ろうとしているが、水の関係もあり今後検討ということになる。谷津田では、例えば不耕起栽培など通常と違う稲作を取り入れたらどうかと思っている。

委員

例えば、ふたをしたパイプライン化した水路と開放された水路とでは、生物の生存環境の違いが出てくると思う。もう少し具体的に、海上に皆さんを案内して見せるということであれば、どういったものを見せるためにこういう整備をするのだという計画をきちんと立てていただきたいと思う。

事務局

谷津田の再生は、単に見せるということではなく、休耕田を水田に再生するとどのくらい生物が増えてくるかを、県民の方にも参加してもらい調査しようということで、専門的ではなく簡単な調査になると思うが、結果として見せていこうという考え方である。また再生を手伝っていただいた方に将来もそこにかかわっていただけるような仕組みも作っていきたいと考えている。

委員

生物調査に県民参加というのがあるが、基本的にやめてほしい。海上の森は博物館機能を持たなかった。生物調査は博物館機能がなければできない。できないことをやると生物多様性を踏みにじって結果的に荒らすだけで終わってしまう。どのような生物がい

るかごく初歩的なレベルで調べることでやってはいけないとは言わないが、できないことをやってはいけないということを忘れないでいただきたいと思う。

委員

希少動物の調査について、情報公開に際しての安全性と、逆に情報公開していく必要性との整合性をいかに図っていくかが問われると思う。これまでのデータの蓄積を十分活用し、調査の精度を高めるとともに結果の活用を図り保全計画を立てる必要があるのではないかと。生物多様性のツアーというと、普通、極めて多様な生物がいて、保全すべき地域で質が高いと考える。そこにツアーで入っていくことで環境に負荷をかけていいのかと思う。コース整備も多様性の密度が濃いポイントは回避すべきだ。

事務局

谷津田の再生の調査は、博物館機能的な綿密なものはとてもできないと思っており、県民が参加し、生息の学習をするレベルだと思っている。

既存資料調査は、今までいろいろな調査がされ蓄積されているので、そこから生物多様性をどのように抜き出して、また現在どうなっているか、その精度を上げていくことも必要かと思う。基本的に生物多様性が前面ではなく、里山の再生という通常活動の中で生物多様性をうまく理解できて、具体的に分かるように切り取れたらいいと思っている。

事務局

海上の森にもいろいろな動植物がいて、身近なものもたくさんいるわけだから、そういうところをひとつひとつ丁寧に見ることによって生物多様性はどのようなものかが分かると考えているが、その辺りについても何かあればお願いしたい。

委員

希少動植物を巡るツアーだとは思っていないし、あってはならないことだと思う。ただ、絶滅危惧種があるということは底辺にいかにも多様な動植物があるかということであり、関係する各機関、行政の各セクター、各団体や地元の方とも事前合意形成が必要だと考える。委員会開催というところにパンフレット作成等があるが、このあたりに入る前にそういう合意形成をぜひやっていただきたいと思う。

委員

COP10 が来るからといって海上の森の生物多様性を振り回す必要はないと思う。今まで保全の努力をしてきた方々がいるわけで、そういうところから私たちは何を学ぶの

かが大事だと思う。生物多様性を啓発する意味がよく分からず、話を余計にややこしくしてしまう気がしてしょうがない。要するに自然の大切さをみんなで学びましょうという話だと思う。海上の森ではもう少し柔らかく県民・市民が自然を学んできたと思っているので、その点を注意してほしいと思う。

資料にシデコブシの保全の話があるが、海上の森自然環境保全地域における野生動物の現状について、サクセッションをここで止めると考えているのか。あるいはそう決断しているのか。

5カ所で森林モニタリングをしているのは自然の動きを客観的に見ていこうという話だと思うが、そういうものときちんとリンクさせていかないといけない。そこに珍しいシデコブシやハルリンドウ、スマイレサイシンがあるから守らなければならないという話と、長い目で自然環境、保全環境を見ていくという話とでは随分方向性が違うと思う。

「私たちはこのようなポリシーで、このような自然を、こういうように保全していこうと考えている」ということを示せば、COP10への大きなインパクトにもなるだろうし、海上の森が評価される理由にもなると思う。環境部と森林保全との両方でどのように考えているか、お聞きする。

委員

今の件についてはいろいろ関わっているが、基本的に遷移を止めたい。なぜなら現在の海上には、砂防工事をやって緑化工事をやったときにヤシャブシやハリエンジュなどの肥料木を大量に入れたため、本来貧栄養で遷移が遅かったはずの瀬戸層群の丘陵地が非常に富栄養化して、遷移が急速に進行するようになった。基本的には移入種問題に端を発した人為的な現象であり、可能な限り止めたいというのが大原則である。しかし現実論としてそのようなことは不可能であり、極めて特殊な所をポイント的に行なうのが精いっぱいである。自然環境保全地域に入っているのはほとんど瀬戸層群のやせ山であり、基本的に現在の遷移は自然現象とは考えていない。

委員

根本的な話として、海上の森でゾーンを分けているが、コナラの森はどうか、人工林はどうか、それぞれをどのようにしていくのか、その観点を明確にしておかないとぶれてしまう。農地の整備も、それぞれの場所・環境に生態系があり、慎重に考えておくべきことだと思う。本当はその辺のところを徐々に議論していったって、ある程度みんなが分かるようにしておかなければいけないのではないかと考えており、今回はちょっと資料が不足しているので話し合いを避けているが、そのようなことが根底にあると思っている。

委員

自然環境保全地域に限らず遷移を止めるのが基本的なコンセプトだと思う。例えば、水田も人工的な産物で、耕作しなければ草ぼうぼうとなる。人工林も過密となり、林相が変わっていく。里地里山の管理からいえば基本的に遷移を止めたい。現実問題として遷移を止められるのは極めて特定の場所しかできないので、大部分は遷移に委ねるほかないのだが、基本的なコンセプトは一貫しているのではないかと思う。

委員

再生を目指す農地のところは、昔と違う方向に変化している。やはり再生地の田んぼぐらいは昔流でやってもらいたい。溝の所にホタルがたくさん生息しているが、ため池も注意して作業をしないといけない。ホタルの時期には地元ではない車がたくさん上がってくるので非常に身の危険を感じながら対応している。昔は山巡査というのが地元から選ばれていた。海上の人間の中で一人でも囑託員として選んで、意識をきちんとくみ上げるようなことをやっていけば今よりはよくなるだろうと思う。

委員

山の中にプロジェクトのための遊び基地を造ったとき、再生を目指す農地の所にあった昔ながらのあぜを壊して埋め立てて通路を造ったが、われわれの生活領域の中に次から次へと新しいものが出来上がっていく。それに対して海上の森の会も全然反応がない。その辺のところには圧迫感を感じていくだけでは意味がないと思う。ロスは大きいが昔のやり方でいいではないかというような意識をしてもらえると、もっと違った形が見えてくるのではないか。

座長

今の住民の意見を入れながら再生事業を行なっていくということについてはいかがか。

事務局

遷移については一番頭の痛い問題で、昔の里山は遷移の止まった状態だと思うが、人間の手が入らなくなってからは、遷移を止めたくても実際、全域を止めるということは不可能だと思っている。基本的には、人間の手で植えたものは人間の中でコントロールしていかなければならず、間伐を適正に進めていかなければいけない。もう一つは、針広混交林という不適正な森になった所は、針葉樹を生かすのか、広葉樹を生かすのか、モザイク状に共生を図っていくのかという話も、やはり手を入れていかなければならないと思っている。また、希少種を中心にしてある程度手を入れながら遷移をコントロールすることになると思う。農地については、昔からの水路やあぜも生かし、昔の里の復

元をする中で生物多様性が保たれていけるような場を作れば良いと思っている。

委員

海上では明治以降、遷移をコントロールしたような里山的施業というものが行なわれてきた試しはなく、そのときそのときでドラスティックに変えてきただけである。なので県として「私たちはこんなイメージで森づくりをするのです」ということをメッセージとして出さなければいけない。森林保全の立場と環境の立場から同じ意見が出てこない、県民は混乱するだろう。

委員

今までと違う話で、昨年愛知県内の環境活動の全リストを作ってみて気がついたが、県内ではものすごく膨大な量の環境活動が行なわれているが、非常に連携が悪い。里山活動は市町村でもたくさんやっている。相互関係をぜひ考えてほしい。県と市町村の役割分担は重要で、今後検討していただきたい。直接住民と対しているのは市町村で、県の基本的な役割は後方支援にあると思う。後方支援になるためには、権威となる研究機関が必要で、森林・林業技術センターはかなりしっかりした研究機関を持っているので、センターとの連携を検討していただきたい。そうしないと、このような体系的な環境活動の推進はなかなか難しいのではないかという気がする。

座長

今日のいろいろな議論をまとめると、まず海上の森をどうするのかという明確なメッセージを出していかなければいけない。これはぜひ次の会議でも進めていきたい。きちんと文書化して示されるようなところで話し合っていきたい。

COP10 に関して、どのようなツアーにするのかというところでいろいろな方との合意形成が必要だという意見があった。これは非常に重要で、そういう意見がくみ取れるような形での委員会およびツアーコースを考えていただきたい。

海上の森はエクスカージョンコースに決まっているのか。

環境部

現在、愛知県が関連事業会場として出しているのは記念公園本体の方である。生物多様性や自然環境保全に関して出てくるようなエクスカージョンはこれから検討していく。

座長

その検討結果も踏まえて、海上の森の委員会でもツアープログラムコース等を考えていくということでもよろしくお願ひしたい。

環境部

エクスカージョンを何のためにやるのか、例えば参加者の楽しみだけのためにやるのか、視察地側が研究活動などをモデルとして発信していくのか、そういった点も踏まえながら検討を進めることになる。皆様からもご意見をいただきたいと思う。

委員

去年、誘致構想の委員会というのがあり膨大な資料を作ったが、残念ながら構想がまとまる前に誘致が決まってしまった。ああいうものがきちんと活かされているのか。

環境部

開催の計画は、誘致構想の考え方を具体的にどのようにするのかということで今まとめ上げており、近日中に発表する。COP10 誘致構想策定委員会の方々のご意見は基本路線として踏まえた形になっている。

座長

海上の森の専門委員会というのはいつ頃どのように開かれて、この協議会との関係はどのようになるのか。

事務局

6月ぐらいに組織し、委員会でのいろいろな検討の状況は協議会にもご報告しながら、並行して進めるものと考えている。

座長

評価について、里の教室など運営委託するにあたり、これまでの総括がないと企画を委託できないと思う。数値だけでなく内容等を一回総括していただいて、委託先への資料として提示していただければと思う。また、委託する際だけでなく、もう少し前向きな検討の議題と参考になるような評価資料を来年度の末にはいただけたらと思う。例えばピーターがどのくらいいるのか、本当に育っているのか。来館者のアンケートでのいろいろな指摘も真摯にとらえて検討していかなければならない。また、意見に対しどういうことを行なったかという、来た方とのキャッチボールがホームページ等のできるような仕組みも必要だと思う。

委員

前日も、前々回も申し上げたが、私どもは十分に議論を尽くせなくても「了承しまし

た」といわざるを得ない。もう少し具体的な話を常に聞かせてほしい。年2回でなくていいと思う。

(3) その他

事務局

本日いただいた意見は今後の参考にして取り組みを進めていきたいと思う。年2回というのはおそらく少ないが、1度に2時間が限界とも思う。会議以外の形でも考えていかなければいけないと思うので今後ともよろしく願いしたい。

これをもちまして本日の運営協議会を終了させていただきます。お忙しい中どうもありがとうございました。

閉会